

にじゅうしはいあしき じぞう 二十四拝足切り地蔵

せいぶにじゅうしはい じぞうしんこう とくがわじだい しよみん あいだ しんどう どうそしん どうろ まつ つうこうにん まも かみ むす 結びついて各地の
西部二十四拝の地蔵信仰は徳川時代から庶民の間に浸透し、道祖神（道路わきに祀られる通行人を守る神）と結びついて各地の
地蔵尊の中に入ってきました。これは、文化、文政の頃（一八〇四〜一八三〇年）から明治、大正にかけて信仰の対象として仏教
思想に基いて自然発生したものです。各地の郷村を単位とし、木像は堂内に、石像は路傍に祭られた地蔵菩薩を巡拝しました。
また、これらは郷村の六道の辻にあり、冥界の苦を救い、一切衆生の教化が目的であったように伝えられています。

こうした背景で、あしきりじぞう とち ころしすずきけ げんざい うえまつ あたり かんぼう ころ じあん しもぐみ げんざい はいひがし むつつじ じぶん
こうした背景で、足切地蔵も土地の郷士鈴木家（現在の植松の辺）が寛保の頃に自庵として下組（現在の林東）の六ツ辻の自分
家の墓地のほとりに建立し、信仰したのが始まりです。後に二十四拝の十三番として信仰の対象となりました。
当時は土佐の殿様の参勤交代の折り、往還り必ずありがたい地蔵尊として下乗（乗物から降りること）して参拝の上、お通り
になったと伝えられています。

むかし 庵 うら りっぱ すずきけ ぼせき まえ みち そう にそう ぼせき じようやせう 道し
昔をしのばれるものは、庵の裏にある立派な鈴木家の墓石と前にある道しるべや僧、尼僧の墓石、常夜燈などがあります。道し

るべには、別記のように書いています。慈光禅尼の年代等は不明ですが、古老の間では大変な修行をされた高貴な尼僧と語られており、常夜燈には寛保元年鈴木氏と記されています。

当時の庵は、明治の初期の大火で全焼したので、地蔵尊の仏像の行方等はだれも聞いていません。

現在の庵は、鈴木家衰亡により、林組、下林、植松などの住民が明治二十九年より再建を思い立ち、三十一年に地蔵尊の木像を萩原寺より戴いて本尊としたのです。昭和初期の頃までは、二十四日の地蔵尊の日には参拝人も多く、地区民が持ちよって小豆粥などのお接待が必ず行われていました。

西部二十四拝の順路は、姫の郷軍人墓地に始まり、花稻村（先林、本村）、北より柞田郷（油井、山田、北岡、山王、八丁）を経て、下組、小山、萩原、上の段と巡拝して豊浜の二十四番で終わるようになっていきます。

〈荒木次郎〉

『ふるさとむかしむかし』大野原町より



(道しるべ)